

### 事例 3 「やりたい」という意欲が「わかる」につながるC男

#### (1) 対象生徒のプロフィール

高等部2年生の男子。本校には中学部1年から在籍している。

学校生活では総じて意欲的で、昼休みには晴れていると三輪自転車を嬉しそうに乗り回している元気で活発な生徒である。積極的に何でも真っ先にやりたがることも多い。競争心が旺盛で負けず嫌いの面があり、負けたりできなかつたりすると落ち込む。また、ちょっとした体調不良でも症状を訴えて辛そうな様子を見せるなど、心配なことがあると気にして表情や態度に顕著に現れる。しかし、立ち直りも早く気持ちを切り替えて次への意欲に繋げていくことも多い。

学校生活の中での簡単な指示や会話は理解できる。見通しをもって行動することもできる。かな文字の読み書きはまだ完全でなく、語彙も多くはない。会話の発音は不明瞭だが聞き取ることができる範囲である。教師にはよく話しかけてくるがパターン化している内容が多い。教師との会話場面で自分の主張や思いが肯定されないと気持ちが高揚し、肩や腕を強く掴んでくることもある。正義感が強く、友だちとのかかわり方も遠慮がなく、時として敬遠されることもある。

ものごとの開始時点でスムーズに行動や動作に移行できない身体的な障害が見られる。教師から急に指示され動作を行おうとした時、自分の期待した行動を勢い込んで行おうとした時などに数秒間体が硬直し動作が止まる。その後、緊張から解放されたかのように開始することができる。

#### (2) 課題選択の傾向

今回取り上げた課題「記憶」(箱の中身)の選択時ではC男は「決めた!」と迷わずこの課題を選んだ。それまでは主に手先を使う課題を好んで選んでいたがこの時は違った。C男には好きな教師の課題を選ぶという傾向も見受けられるが、グループ学習の担当教師が提示した課題でもあり、その延長としての興味を感じたのではないかと考えられた。また、昨年度も同じ課題が出ており、その時に他の生徒の発表を見ているので見通しをもつことができたのかもしれない。得意なこと、自分の知っていること、経験のあることなどが選択の際の大きな動機となっているように思われる。

#### (3) 学習での様子と手立て

##### ① 課題内容

この「記憶」(箱の中身)の課題は段ボール箱の中に入っている何点かの品物を見て覚え、次に箱の中を見ないで入っている品物の名称をすべて答えるというものである。品物は身近にある日用雑貨品や文房具類を中心に選んだ。取り扱いのしやすさや箱の中に入れる必要からあまり大きな物、重い物は除いた。(表Ⅳ-2)

この課題はゲーム感覚で楽しめる反面、集中力を発揮して臨むことが求められる。

##### ② 練習

まず練習で心がけたことは、生徒が学習の手順すなわち発表のやり方を覚えるということであった。生徒の的確な発表に結びつけるためにどのような練習の仕方や提示の仕方をすればよいかという教師側の課題でもある。声かけのタイミングや明快な指示、生徒に合わせた出題レベルや当初の課題設定の変更も練習を通して必要になる。その時々場面把握や物と生徒、教師の位置関係も発表という形態をとるこの学習には欠かせない要素である。

練習を始めてすぐにC男の最初のつまずきが出てきた。初めに見せた10数点の品物の半数位の名称を正確に答えることができなかつたのである。名称はわからないが用途を知っているものは身振りや答えていた。そこでまずC男の名称の認知度を調べ、正しい名称を覚えるとともに練習は「◎レベル」(表Ⅳ-2)の品物から始めた。興味の持続をはかるためステップを細かくして段階的に品目のレベルと数を上げていった(表Ⅳ-3)。生徒の習熟度を把握し、無理のない出題を設定することで次への意欲に繋げていきたい。

練習期間中、C男は課題や目標を常に意識していて頻りに教師に確認を求めてきた。名称の認知度の向上は今一つであったが、内容に関する指摘を理解し、改善しようと努力するC男の姿があった。発表が近づくにつれC男の頭は発表課題のことと合格のメダルのものでいっぱいのものであった。パーフェクト合格を目指すことで緊張が極度に高まっていくのである。適度の緊張感が必要であるが、C男の場合はそれが強くなり過ぎることが心配であった。

### ③発表

実際には見学の生徒や挑戦する生徒にわからないように教師が空き箱の中に数点の品物を入れる。数はあらかじめ練習時の様子を見て、挑戦する生徒にも相談して決定し、発表時に見学する生徒と審査員の教師へ伝える。挑戦する生徒が空き箱の中を覗き中の全品目の名称を覚える。覚えたら箱を閉める。挑戦する生徒は箱から離れたところに立ち、教師が生徒に箱の中の品物の名称を尋ねる。生徒が答えたらその品物を箱から出して一つ一つ見学する生徒と一緒に正解かどうかを確認する。

C男は緊張感もあまり見せずに自信をもって発表に臨んだ。課題品目は「ボール、セロテープ、のこぎり、ティッシュ、コップ、帽子」の「◎レベル」と「○レベル」の6品目でスムーズに名称を答えることができた。追加として他の教師の要望で同じ6品目に「○レベル」の「電池」をもう一つ加えて7品目として再度挑戦し「電池」を「でんき」と答えてしまったがパーフェクト合格を勝ち取った。

### (4) 考察

手順を機械的にこなすことでできる課題ではない。箱の中身は毎回入れ替わる。その度に正確に品物を認識し、名称を思い浮かべ、覚えなければならない。結果はすぐ目の前に取り出される品物で一目瞭然である。挑戦する生徒には集中力と緊張感が求められる課題であり、その到達点として明確に「わかる」ことが求められる。

今回のこの課題自体が生徒一人一人の「わかる」ための手立てであり、やり方を覚え実行することがそのまま「わかる」「できる」につながる課題であると言える。

C男のみならず、課題にはどの生徒にもわかりやすく興味を覚える教材を手配すること

が大切である。やり方がわかる為の工夫や、意欲を持続することができる手順が必要であると言える。すなわち自分のやることがわかることが第一歩であると言える。

この課題ではまずできるだけつまずきの生じない内容や形式を考案し、生徒がわかりやすいと思われる方法を設定した。さらに練習から発表に至るまでの過程では、スモールステップを心がけ、無理のない認知レベルの品物と数を設定するようにした。成功体験を積み重ねていくことは興味・関心の持続にとって大切なことであると考え。いかに生徒の興味・関心を高め持続させるかを考えたとき、この課題のポイントとして「隠す」という要素が重要な働きをしていることも見逃せない。誰もが箱のふたを開けるときのワクワクする気持ちに共感するものがあるのではないだろうか。

自分が今何をしなければならないのか。今何をしているのか。その生徒自身の意欲と意識の強弱が練習や発表の場に現れる。思い入れが強く、興味・関心をもった事には積極的に食らいついていくC男の性分が存分に発揮された課題の一つだったのではないかと思っている。

表Ⅳ-2 品物と名称の認知度

名称の認知度			備考
◎レベル (知っていた物)	○レベル (確実になかった物)	△レベル (覚えられなかった物)	
ボール ハサミ 皿 スプーン えんぴつ ティッシュ コップ のり ハンカチ 帽子	のこぎり セロテープ タンバリン 電池 たわし 茶わん ホッチキス	電球を「電気」 ものさし 筆 ペットボトル 封筒 カメラを「写真」 洗濯ばさみ マグネット かなづち ベンチ 輪ゴム 押しピン など	・発音が不明瞭なためや聞き取りにくい名称がある ・名称を思い出さない時は動作で使い方を示す ・答えられないときは何故か「ローソク」と言うことがある ・◎レベルの品物はその後言えるようになったものが多い

表Ⅳ-3 練習過程

1日目	「◎レベル」で3品目に挑戦	→ 2回実施して2回成功
2日目	名称の確認(上記表参照)	
3日目	名称の確認(上記表参照)	
4日目	「◎レベル」で4品目に挑戦	→ 1回実施して成功
	「◎レベル」と「○レベル」で4品目に挑戦	→ 1回実施して失敗(3/4)
5日目	「◎レベル」と「○レベル」で3品目に挑戦	→ 1回実施して成功
	「◎レベル」と「○レベル」で4品目に挑戦	→ 1回実施して成功
6日目	「◎レベル」と「○レベル」で4品目に挑戦	→ 1回実施して成功
	「◎レベル」と「○レベル」で5品目に挑戦	→ 1回実施して成功
	「◎レベル」と「○レベル」で6品目に挑戦	→ 1回実施して失敗(5/6)
7日目	「◎レベル」と「○レベル」で6品目に挑戦	→ 1回実施して失敗(4/6)
	時間をおいて同じ品目でもう1回挑戦	→ 成功

(橋本直紀)